Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

精神病理学における対話主義的アプローチに関するノート : ルセイカー兄弟の『統合失調症と自己の宿命』に寄せて

本林, 良章

(Citation)
21世紀倫理創成研究,8:126-134

(Issue Date)
2015-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009417

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009417

精神病理学における対話主義的アプローチに関するノート
――ルセイカー兄弟の『統合失調症と自己の宿命』に寄せて

本林　良章

序

本研究ノートでは、精神病理学における対話主義的アプローチ、特にポール・ルセイカー（Paul Lysaker）とジョン・ルセイカー（John Lysaker）によって提出された『統合失調症と自己の宿命』（原題：*Schizophrenia and the Fate of the Self*）に関する概観と、それへの批判的検討を行う。最終的には本書の議論を下敷きとして、今後の課題として研究が期待される領野を示したい。

問題の背景

現象学に影響を受けた精神病理学は――現存在分析、現象学的精神病理学、人間学的精神病理学、近年では臨床哲学として呼称されながら――精神病理現象やそれを抱える患者の一人称的経験の解明に多くを寄与してきた。そして現代においても、サス（L.A. Sass）、パルナス（Josef Parnas）、フックス（Thomas Fuchs）、スタンゲリーニ（Giovanni Stanghellini）等が欧米で精力的にこの方面での仕事を展開している。ただし、村上が指摘するように（村上 2011, 6 頁）、「哲学的な」精神病理学の仕事の多くは精神病の病理構造の解明を目指すものであり、治癒や心理療法に議論の焦点を合わせるものは少ないように思われる。

勿論、病理構造の解明や患者の一人称的経験の理解が治療に対して持つ意義は重大であるとはいえ、哲学を基盤としながらも心理療法に関して積極的に言及する研究も求められているのではないだろうか。筆者は統合失調症を Common Sense（共通感覚・常識）の病理として捉える精神病理学的研究（ex. ブランケンブルク 1978; 木村 1973; Stanghellini 2004）に触発される形で共通感覚研究に従事してきた結果[(1)]、共通感覚の回復（岡本 2003）や精神病からの治癒というトピックに関心が芽生えてきた。こうした問題関心から欧米圏における哲学と精神医学に跨る学際的研究を俯瞰すると[(2)]、一つの著作が浮上する。それがルセイカー兄弟（以下、ルセイカー等と表記）による『統合失調症と自己の宿命』で

ある。ルセイカー等は、現象学よりも対話主義に重点を置き、自己を対話として捉え、その視点から統合失調症の病理に加えて心理療法までも射程にいれた議論を展開している点において、上の現象学的精神医学者たちとはやや趣を異としている。

対話的自己とその病理

紙面の都合上、本書全体の要約はわれわれの本意ではないが、さしあたり彼らの目標を確認しておく必要があるだろう。「われわれの目標は、統合失調症に苦しむ者の根本的経験の記述に専心し、これに寄与することである。もう少し明確に言うと、病の鍵である一人称的次元のいくつかを議論すること、それも [臨床的次元か心理社会的次元かの] 二元論を避け、かつ、統合失調症の臨床的かつ心理社会的次元の双方に光を当てる仕方で議論すること、及び治療に対する具体的な方針を提示する仕方で議論することがわれわれの希望である」(vii. [　] 内は本林)。

こうした目標を携えて、ルセイカー等は第三章において対話的自己に関する仮説を提出する。「人間は諸々の対話のアンサンブルに従事し、またアンサンブルとして生きている。言い換えると、われわれがそれであるところの人生の場 (locus)、そこから一人称が生じるところの人生の場は対話的である」(43)。また彼らは、バフチン（によるドストエフスキーの解釈)、ニーチェの主観的複数性（subjective multiplicity）に関する見解、デューイやミードの社会心理学、ハイデガーの現存在分析論に依拠しながら（44-45)、次のようにより明確に対話主義の立場を言い表す、「各人の感情、思考、行動を観察してみると、そこに見出されるのは単一の属性ではなく、しばしばまとまり無くさらには相反さえする (contentious）アンサンブルである。例えば、外交的な者としての自己と内向的な者としての自己、或いは、企業の重役としての自己と銃コレクターとしての自己、というふうに」(45)。その後、セルフポジション（self-positon）という概念の導入を通じて、対話的自己に関する見方を洗練させていく。

セルフポジションはかなり幅広い概念である。ルセイカー等はまず二種のセルフポジションを区別する、すなわちキャラクターポジション（character-position）とメタポジション (meta-position) である (48)。キャラクターポジションとは「市民としての自己」「娘としての自己」「女性としての自己」等、「われわれの生活というドラマにて演じられるキャラクター」である（48)。一方、メタポジショ

ンとはセルフポジションに関するポジション、すなわちわれわれの活動や宿命に対する自分自身による価値付けに関するものである（48）。例としては、「成功者としての自己」「犠牲者としての自己」「幸運な者としての自己」等がある（54, Table 3.1）。

さらに、ルセイカー等は第三のセルフポジションたる有機体ポジションを導入する。彼らが例として挙げるのは、眼前の喧嘩に対する、怯え（feeling threatened）の感覚である（52）。「怯えている者としての自己」「飢えている者としての自己」に例示されるように、この第三のポジションは「有機体の安全に関する前反省的開示」を示す（54, Table 3.1）。

「自己内対話と対人的対話（intra-and interpersonal dialogue）を通じて自己感が生じるというのがわれわれの提案である」と言うように、これら三種のセルフポジションの相互交流により自己感が生じるというのがルセイカー等の主張である（62）。セルフポジションは「星座 stars in a constellation」のように相互交流し意味づけ合う（63）。自己とは各セルフポジションの複合体、すなわちアンサンブルである。私は哲学の研究者であり（キャラクターポジション）、両親の息子であり（キャラクターポジション）、内気な人間であり（キャラクターポジション）、そうした内気な性格に時としてコンプレックスを感じており（メタポジション）、急に目の前を速いスピードで横切った車に対して危機を覚える（有機体ポジション）。これらの各ポジションが相互交流する布置において、私という自己が浮上する。逆に言うと彼らにとって、統合失調症とはこうしたセルフポジション間の相互交流の病理に他ならない。

すなわちこうした対話的自己という観点を踏まえて、ルセイカー等は第四章において精神病理学的議論を展開する。「特にわれわれは次のことを提案する。すなわち、もしセルフポジションの相互に活気付ける交流が著しく損なわれた場合、人は、統合失調症に見られるものに近い、自己が縮小する経験を持つことになるであろう」（70）。彼らは「単一の自己」（the monological self）、「痩せた自己」（the barren self）、「不協和の自己」（the cacophonous self）という三種の病理的事態を想定する。症例を踏まえての詳細な議論が本書では展開されているが、ここではその要点のみを抽出する。単一の自己とは、各セルフポジションの相互交流が停止し、一つ二つのセルフポジションが優勢となる事態である（81ff.）。彼らは、「迫害される自己」（self-as-persecuted）と「愛される自己」（self-as-beloved）の二

つだけのセルフポジションが優勢となった症例グリーグ（Grieg）に単一の自己の例として言及する（80-81）。部分的に症例を引用する。「発病後、彼 [グリーグ] はテレビの中の有名人が自分の男らしさを褒め称えており、かつ、自分が人間離れした技を成し遂げたが故に他の者が自分を追跡し公衆の面前で恥をかかせ可能であれば自分を殺そうとさえしているという信念にとりつかれていた」（39. 強調と [　] 内は本林）。さらに、第二の痩せた自己を示す症例の一として、彼らはウェバーン（Webern）という事例を取り上げる（83ff.）。「ウェバーンは出来事を記述することはできたものの、それらの出来事を彼が感じ、思考し、行ったいかなることへも関連づけることは無かった」（83）。すなわち、彼は「観察はするが影響を与えることのない出来事の入れ物」でしかなく、単一のセルフポジションの保持さえも不能の状態にある（85）。最後に、ルセイカー等は第三の病理すなわち不協和の自己を示す患者の言明を取り上げるが、その言明は「個々の発言が前後の発言にわずかにしか関連していないように思われる」ものや、次々に移り変わる時系列・場面に際して（一貫する）「ナラティヴの糸」が見出せないものである（87）。不協和の自己は文字通り、セルフポジションの不協和（非一貫性）を特徴とする。

こうした対話的自己及びその病理という観点は、臨床医学における患者の病態の把握のみならず、広く人間理解一般へ寄与し得るだろう。ルセイカー等が挙げる例の中でも、次のそれは印象的である。「ある集まりを企画し、そこに数人の家族、二人の過去の恋人、現在の恋人、数人の古い友達、その古い友達を知らない新しい数人の友達、同僚、スーパーヴァイザー、敵になりかけの一人か二人のライバルが集ったことを想像して欲しい」（71-72）。

次にルセイカー等の心理療法への言及を押さえる。心理療法に関する第七章の議論全体の詳細な紹介は本稿の意図ではない。ここでは要点のみを簡潔に押さえることで、それを次節における批判的検討の足がかりとしたい。

ルセイカー等は、痩せた自己、単一の自己、不協和の自己のそれぞれを示す患者に対する心理療法上の要点を示した後に、それら個別病理へのアプローチの基礎たるべき「統合失調症に対する心理療法へのより基本的なアプローチ」に関して言及する（159）。「……もし対話的プロセスが活気づき強化されることを意図するならば、彼ら [クライアント] の一人称的次元は再認され耕されなければならない。このことはクライアントの自己提示（self-presentations）を再提示する

こと（re-presenting）によって部分的に遂行されるが、それは彼らがそうした開示に対して以前可能であったよりもより豊かに出会い反応し得るためなのである。クライアントが自分の描く宿命における自分自身の立場とその宿命への寄与に焦点を合わせ続けられるように、治療者は自身の発言の二人称的アスペクトを強調しながら話し掛ける。すなわち、バスケットボールの試合に出場しているのは、怒りを感じているのは、ルームメイトに困っているのは他ならぬ「あなた」なのですね、というふうに」（159. [　] 内は本林）。なお、ポール・ルセイカーとスタンゲリーニとの共著論文においても、心理療法的過程の狙いを「志向弓」（メルロ＝ポンティ）の再建に見定める等、より現象学的知見を交える形で心理療法における二人称の強調が技法として謳われている（Stanghellini and Lysaker 2007. 特に p. 174）。最後に七章末尾においては、ルセイカー等の心理療法の目的が病の「治療」ではなく病との効果的な付き合い方にある点が力説される（160）。

批判的検討・今後の課題――限界状況への脆弱性と心理療法の宗教哲学

以上の議論を受けてルセイカー等の対話主義の批判的検討に移る。対話主義的アプローチは積極的に心理療法に言及する以上、実践的な意義を持つという点は評価できるが、ここで述べるような形で考察を深める余地があるように思われる。

まず私が着眼したいのは、何も精神病のような際立った精神的問題を抱えておらずとも、上に引用したような、家族、過去の恋人、スーパーヴァイザー、現在の恋人、ライバル等々が一同に集うような葛藤状況は誰でも経験し得るものであるという点である。また別の例として、ルセイカー等は、バーの外で友達といる時に別の男たちに喧嘩をふっかけられた状況を紹介する（53）。この時、われわれは生命的な危機を感じ逃げたいと思うと同時に、友人に忠実であろう（i.e. 自分ひとりだけ逃げるわけにいかずその場に残る等）とするが、これは詰まるところ、「怯えた者としての自己」という有機体ポジションと「友人としての自己」というキャラクターポジションの葛藤状況に他ならない（53）。こうした二律背反的限界状況はわれわれが誰しも経験する以上、これに対する脆弱性こそ問題とするべきではないだろうか[3]。この点において「限界状況の精神病理学」に関するフックスの研究は示唆的である。フックスは、ヤスパースの限界状況の概念を精神病理学に接続する上で「トラウマとしての限界状況」と「限界状況への脆弱性」という視点を提示するが、統合失調症の精神病理学的研究において問題と

なるのは後者であろう（Fuchs 2013）。

それ故、限界状況に対する脆弱性の精神病理学的研究が求められるが、それは例えば限界状況において何が支えとなり得るのかという治癒に関する問いをも視野に入れたものでなくてはならない。ハンセン病患者の臨床研究から「生きがい」という問題を人間学的に徹底的に深めた神谷の『生きがいについて』はその古典的な研究とも言えるだろう（神谷 2004）。既に述べたように、ルセイカー等は心理療法の主眼を病の治療ではなく病との付き合い方に置くが、こうした視点を徹底すると、神谷が問うような生きがいの問題へと行き着く。本書で神谷は「生きがい喪失」という限界状況に際して、「精神的な生きがい」へと焦点を合わせていく。精神的な生きがいは宗教と深く関わるが、それは特定の既成の宗教というよりはそれ以前の宗教的な「心のあり方」とでも言うべきものを指すようである（神谷 2004, 特に 239 頁）。神谷のような宗教的な心のあり方（或いは、私はこれに根ざす生を「治癒的な生き方」と呼びたい）を直接には問題にしないとしても、対話主義的観点から治癒という問題を考える場合、そもそも何故、対話が治癒的な効果を持ち得るのかという心理療法の根本的問題を問わざるを得ず、そこに何かしら宗教的な響きを読み取ることは必至であろう。心理療法における対話を考えるためには、患者と心理療法家のあいだの対話を支える「出会い」という契機をより仔細に検討する必要があるように思われる。というのも、対話が成立するための条件の一が、話者同士の「出会い」である。すなわち、対話が成立するためには、話者同士が共に自他のあいだの共同世界において予め出会っていなければならない[(4)]。木村の「あいだ」は経験的対話に先立つ「出会い」の場所に他ならない。ユング心理学とブーバー対話哲学を理論的背景とするトリューブ『出会いによる精神療法』は、その主たる考察対象が神経症ではあるもののこの方面での参照軸となるだろう。ブーバーはこの書の序にて言う。「心（ゼーレ）は単独ではけっして病むことはなく、つねに『あいだ的なもの』、つまり心とほかの存在者とのあいだに在るものも病むのである。危機を通りぬけた精神療法家は、この『あいだ的なもの』にあえてふれることが許される」（トリューブ 1982, 5 頁）。ルセイカー等が言う二人称の強調はこの「あいだ的なもの」にふれるための一技法とは言えないだろうか。しかし、この「あいだ的なもの」は多分に宗教的なものを含むが故に[(5)]、心理療法における対話というトピックは「心理療法の宗教哲学」という広大な問題系へ繋がる。

註

（1）その一応の成果が博士学位論文「共通感覚の現象学」である（本林 2014a）。

（2）近年、International perspectives in philosophy and psychiatry として精神医学の哲学に関するシリーズがオックスフォード大学出版によって盛んに出版されている。

（3）実は葛藤状況（二律背反・矛盾状況）は、ヤスパースの『世界観の心理学』における限界状況をはじめ、ブロイラーの両価性、ベイトソンのダブルバインド理論、サールズの「相手を狂気に追いやる努力」などにおいて取り上げられており、一定の精神医学的伝統を持つ。筆者はこれらの研究に依拠しながら、現在、葛藤矛盾状況における人間存在を扱う「矛盾の現象学」を構想している。ヤスパース 1997、ブロイラー 1998、ベイトソン 2000、サールズ 1984 を参照。また矛盾の現象学は、脆弱性（ヴァルナラビリティ）の対極概念たるレジリアンスの研究（ex. 加藤 2009）と連関することが予測される。以上の構想については、機を改めて発表したい。なお、ベイトソンのダブルバインド理論とブロイラーの両価性概念の同等性については、人見 2008 により学んだ。また上に葛藤状況は病者のみならず誰でも経験し得ると書いたが、そのことはブロイラーも両価的コンプレックスに関して既に指摘している（ブロイラー 1998, 138 頁）。すなわち、両価的コンプレックスの精神への影響は病者に限られない、と。

（4）本文は木村の「あいだ」の概念を念頭に置いている。「あいだ」については特に木村 2005 を参照。

（5）木村は、ブーバーに言及しその宗教的スタンスからは距離を取りつつも、「あいだ」が宗教的なニュアンスを持つことは認めている（木村 2005, Ch. 12）。また心理療法と宗教の関わりについての私の問題意識は、霜山徳爾『素足の心理療法』に拠るところが大きい。これについては書評を記した（本林 2014b）。

文献

Lysaker, Paul and John Lysaker. *Schizophrenia and the Fate of the Self.* Oxford: Oxford University Press, 2008 の参照・引用については、本文に頁数のみを記した。引用に際して、（　）により原語を示した。

ベイトソン , G.「精神分裂症の理論家に向けて」、『精神の生態学』（改定第２版）、佐藤良明訳、新思索社、2000 年、288-319 頁。
ブランケンブルク , W.『自明性の喪失　分裂病の現象学』、木村敏・岡本進・島弘嗣共訳、みすず書房、1978 年。
ブロイラー , オイゲン「両価性」、『精神分裂病の概念――精神医学論文集』、人見一彦監訳、向井泰二郎・笹野京子訳、学樹書院、1998 年、135-157 頁。
Fuchs, Thomas. “Existential Vulnerability: Toward a Psychopathology of Limit Situations,” *Psychopathology,* 46, pp.301-308.
人見一彦「統合失調症における心理療法の意義」、『近畿大学臨床心理センター紀要』、創刊号、2008 年、５-12 頁。
ヤスパース , カール『世界観の心理学』、重田英世訳、創文社、1997 年。
加藤敏「現代精神医学におけるレジリアンスの概念の意義」、『レジリアンス―現代精神医学の新しいパラダイム』、加藤敏・八木剛平編、金原出版株式会社、2009 年、１-23 頁。
神谷美恵子『生きがいについて』（神谷美恵子コレクション）、みすず書房、2004 年。
木村敏『異常の構造』、講談社現代新書、1973 年。
木村敏『あいだ』、ちくま学芸文庫、2005 年。
村上靖彦『治癒の現象学』、講談社、2011 年。
本林良章「共通感覚の現象学」、博士学位論文、神戸大学、2014a 年。
本林良章「現象学的人間学的心理療法――書評：霜山徳爾『素足の心理療法』（みすず書房、2012 年）」、『愛知』、第 26 号、2014b 年、140-144 頁。
岡本慶子「統合失調症における共通感覚の回復について：友人関係「たわむれあい」を通して」、『精神神經學雜誌』、第 105 巻第 9 号、2003 年、1186-1205 頁。
サールズ , H・F「相手を狂気に追いやる努力――分裂病の病因と精神療法に存する一要素――」、中井久夫監訳・解説、都筑利雄他訳、『岩波講座　精神の科学　別巻　諸外国の研究状況と展望』、飯田真他編、岩波書店、1984 年、１-37 頁（中井の解説を含む）。
Stanghellini, Giovanni. *Disembodied Spirits and Deanimated Bodies: The Psychopathology of Common Sense.* Oxford: Oxford University Press, 2004.
Stanghellini, Giovannni and Paul H. Lysaker, “The Psychotherapy of Phenomenology: Intersubjectivity and the Search for the Recovery of First- and

Second-Person Awareness,” *American Journal of Psychotherapy,* Vol. 61, No. 2, 2007, pp. 163-179.
トリューブ , ハンス『出会いによる精神療法』（宮本忠雄・石福恒雄）、金剛出版、1982 年。
※本研究は、JSPS 科研費（特別研究員奨励費）25・6377 の支援を得た。
（日本学術振興会特別研究員 PD・神戸大学）